四谷の千枚田だより

第222号

四谷の千枚田「つなぐ棚田遺産」に選定

貴重な国民的財産である棚田を保全し、棚田地域の有する多面にわたる機能の維持増進を図り、もって棚田地域の持続的発展及び国民生活の安定向上に寄与することを目的として、令和元年に棚田地域振興法が施行され、約二年が経過し、法に基づく、指定棚田地域の指定や指定棚田地域振興活動計画の認定が進んでおり、着実に棚田地域の振興に向けた取組が広がっている。

そこで、農林水産省では、棚田地域の振興に関する取組を積極的に評価し、国民の皆さまに、棚田地域の活性化や棚田の有する多面的な機能に対するより一層のご理解とご協力をいただくことを目的として、改めて優良な棚田を認定する取組として、「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～（ポスト棚田百選）」を実施することとし、令和三年十一月十五日～十二月十五日の間、推薦地区の募集を実施した。

令和四年二月十四日に開催した外部有識者から構成されるつなぐ棚田遺産選定委員会（第二回）において、二百七十一の棚田が「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」として選定。

愛知県では岡崎市の千万町棚田と四谷の千枚田が選定された。

「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に選定された団体はその棚田を含めて地域振興に係わる取り組みを行う団体として、令和四年三月二十五日に農林水産大臣による認定が行われる。なお認定証授与式はコロナ禍ということでオンラインで行われる。四谷の千枚田の認定授与式は新城市役所においてオンラインで行われる。

農水省は平成十一年に「日本の棚田百選」として百三十四か所を認定している。認定から二十三年が経過し、なかには担い手不足から耕作放棄、荒廃しているところもある。

新たに選定された「つなぐ棚田遺産」の二百七十一か所のうち前回に続いて選ばれたのは九十四か所で、四十か所は何らかの事情で選出されなかった。

身近では、設楽町の「長江の棚田」も現在は農家一軒となり、選出されなかも

※棚田地域振興法：貴重な国民的財産である棚田を保全し、棚田地域の有する多面にわたる機能の維持増進を図り、もって棚田地域の持続的発展及び国民生活の安定向上に寄与することを目的として、令和元年に施行。

朝霜の千枚田　2月17日撮影

った。

四谷集落協定勉強会

二月十二日、連谷会館において、中山間地等直接支払四谷集落協定（代表 村雲伸一）の活動の一環として愛知東農協営農部高木勤係長を講師に「稲作における肥料散布」などの勉強会を行った。

肥料とは植物を成長させるための栄養分として人間が施すもの。

植物の生育に伴い土壌から減少する窒素やリンなどを補給しなければ持続困難であり、その減少分を補給するために用いるのが肥料であり、特に窒素・リン酸・カリウムは肥料の三要素と呼ばれる。

三要素のそれぞれの特徴は・窒素（N）ー植物を大きく成長させる作用があり、特に葉や茎を大きくする。葉肥ともいわれる。・リン（P）ー開花結実に影響し、花肥、または実肥といわれる。・カリウム（K）ー葉で作られた炭水化物を根に送り、根の発育を促し、根肥といわれる。

これら三要素を物理的にブレンドした粒状配合肥料が「ひとまきくん」であり、バルクブレンディング肥料と呼ばれ、頭文字をとって「BB肥料」と呼ばれている。

質問で、「施肥後の水面にアワ状の物体が発生するが…」の問いに「ブレンド、コーティングしたものが溶けるもので、拡散するから大丈夫である」。施肥は代掻き前に散布、早く土の中へ混ぜること。

玄米茶ワークショップ

二月二十日、四谷の千枚田（鞍掛山麓千枚田保存会・集落協定・四谷の千枚田地域振興協議会）は会員の柴田賢治郎、原田英史らの発案により地域住民を取り込んだ新しい試みとして連谷会館で玄米茶ワークショップを開いた。

市内作手の若手製茶業鈴木克也さんを招いて四谷の千枚田のミネアサヒ（特A）の玄米をほうろくで煎り煎茶、かぶせ茶、ほうじ茶に混ぜてオリジナル玄米茶を作り、飲み比べながら味わった。

コロナ禍のため、参加した二十四名を九時半から十六時半までに六名づつ四班に分けて行なった。

ジブリパーク

愛・地球博記念公園内（長久手市）に建設されている「ジブリパーク」の開園に合わせ、観光PR動画「風になって遊ぼう」がインターネットで公開されている。

一人の少女が県内十五の観光スポットを駆け抜ける様子をドローンで追う構成。

四谷の千枚田や阿寺の七滝も登場する（四分三十秒）

ヤマアカガエルの産卵

春の一番先の雨の日に産卵するヤマアカガエルが二月十五日の雨で産卵。十七日に二回目の産卵があった。写真は三月四日に撮影したもので、上は十五日の産卵個体が三月四日に孵化開始、オタマジャクシになった。下は十七日に産卵した卵塊で、孵化寸前である。

人間の世界では終息のみえないコロナ禍とか、ロシアのウクライナへの軍事侵攻とか、日々落ち着かないが、生きものたちは、季節を読み間違えることなく着実に息吹いている。…うらやましいことだ。

発行　令和四年三月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責　小山舜二